学校だより
令和5年度11月号
なつのくも
第171号（R5．10．31）
練馬区立光が丘夏の雲小学校
本校ホームページ新QRコードです。スマホなどからも閲覧できます。ご活用ください。

化ける快感

副校長　市村　大

あれだけ暑かった気候が一変し、朝晩は寒さを感じるようになりました。わずか１か月でこれだけ体感が変わると、体調を崩しやすくなります。実際に、９月の終わりから１０月にかけては、学校全体でも欠席者数が増加しました。これから冬に向けて、さらに気温が下がり、空気も乾燥していきます。今一度、生活リズムを整えて、健康的な生活が送れるように気を付けてください。

さて、１１月１０日・１１日には学芸会が予定されています。教員は夏休み中から演目を選択し、９月には台本を配布しました。児童はそれを受けて、自分が演じてみたい役を決め、オーディションなどに臨み、練習に励んでいます。本番まであと１０日ほどしかありませんから、体育館だけでなく、教室や学年フロア、視聴覚室や１階ホールからも練習の様子が伝わってきます。どんな劇が演じられるのか、今からとても楽しみです。

東京にいると、学芸会は昔からある行事というイメージが強いですが、実は全国的な行事ではありません。実際、私が通っていた埼玉県の小学校も、学芸会は行っておらず、６年間毎年音楽会でした。今でもそのままです。そんな私にとっては、学芸会も展覧会も未知の行事でした。東京都の教員になってから、両方とも初めての体験でしたので、最初はとても苦労しました。特に、学芸会指導は、苦い思い出しかありません。

学芸会で初めて指導した演目は「魔法を捨てたマジョリン」でした。これは隣の学級の先生が「マジョリンをやりたい！」と強く推してきたので、内容も知らないまま承諾したのがはじまりです。当時は５年生担任で、学年２学級なのに、私が教員３年目、隣の学級が教員２年目の超若手コンビ。もちろん、二人とも学芸会の指導をしたことはありません。他の学年を参考にしながら見様見まねで指導していきましたが、全然形にならない。そのまま前日リハーサルに突入。なんと、終了予定時刻を過ぎても劇が半分も終わらないという惨状でした。愕然とする担任・子供たち。それを見ていた２年生担任のベテランの先生が、「次の２年生のリハーサル、見ていきなさい」と優しく声を掛けてくださり、学年全員でその様子を見ました。はきはきと元気よく動き回り、みんな生き生きと演じるその姿を見て、体育館の後ろで、自分の指導力不足に一人涙しました。

その時間を使って、体育館袖では、教務主幹と学芸会主任が話し合いを行い、５年生のために、午後に特別にもう一度時間をとってリハーサルをやると決めてくれました。こんな機会をもらって、それすら生かせないでは、面目が立ちません。２年生のリハーサル後、教室に戻ってから、学年全体で改めて話し合いを行いました。今の２年生の劇を見て、自分たちと何が違うのか、自分たちに足りないものは何か、今からできることは何なのか…子供たちも危機感をあらわにし、最後のチャンスに全てをかけようと前を向いてくれました。午後のリハーサルでは、時間を多少オーバーしたものの、何とか終わりまで演じ切ることができました。そして、翌日・翌々日の本番では、最初のリハーサルとは見違えるような素晴らしい劇を演じてくれました。

振り返ると、本当に反省だらけの指導で、見通しも甘かったし、私自身が学芸会を全く理解していませんでした。ど素人のくせに、偉ぶった演出家気取りでいました。自分の指示通りに演じさせようとする…そんな指導で子供たちが乗ってくるわけありません。目の前で見た２年生の劇は、みんなが演じる喜びをもっていました。役になりきる・自分が化けることの快感を得ていたのです。劇の主役は誰か。それは教師ではなく子供たちです。子供たちが劇を創っていくのです。教師は、どこまで行っても裏方なのです。その基本を教わりました。

私自身、子供の頃は非常に恥ずかしがり屋で、人前で何かをするなど、本当に嫌でした。今でも、人前に立つのは苦手です。だから、授業をするときや全校の前で話すときなどは、そこを舞台と思って、自分自身を奮い立たせて演じています。その瞬間の自分は、完全に演者となり、授業という舞台・講演という舞台を楽しんでいるのです。夏雲の子供たちも、いろんなタイプの子がいます。人前に出るのが好きな子も苦手な子も、声が大きい子も小さい子もいます。全員が同じ演技などできるわけがない。それぞれの立場で、自分なりに精一杯演じて、その瞬間を楽しんでくれればいいのです。その集合体が、大きなエネルギーとなって、一つの素晴らしい劇を創ってくれるでしょう。夏雲の子供たち全員の健闘を祈っています。